シェリング神學思想の父祖たち

エルンスト・ベンツ

ドイツ觀念論の哲學とキリスト教神秘思想の古い傳統との間には、極めて密接且つ普遍的な聯關が存在する、このことを先づ豫め指摘しておかう。――所で私は以下の論述の中で、シェリング及び彼の哲學的思惟の特色を最もよく表はした若干の根本概念を特に借りて、このやうな兩者の聯關を先づ解明し、更にキリスト教神學との聯關を斯く明らかにすることによつて、シェリング哲學の獨自性が決して限られた偏頗なものでないことを示すことにしよう。そしてこの研究の目的はかゝつて、シェリングの立場が、實にヨーロッパの精神生活の傳統たるキリスト教の中で確立されたものであるといふ事實を解明し、それによつてシェリング哲學への認識を深める點にあるのである。

ところで或る思想家の思想的系譜を研究する問題は、このシェリングの場合には全く厄介至極な問題といふ他はない。シェリングのやうに自己の哲學的認識の獨創性を天才的に自覺し、しかもこれを斷乎言ひ切つた哲學者は、全く稀である。然し、シェリングの特色を更によく表はした事實として、次のやうな事實が、卽ち彼は自分に思想上の刺戟を與へた人々の說に立歸つて論ずるごく僅かな場合でさへも、稀にしか精確な引用をしないし、又これら彼に影響を與へた人の名前だけを擧げるに止めてゐることも屢々ある、といふ事實が擧げられる。彼が逐語的な引用文を擧げることはごく稀であつて、そのため彼の研究者は間々絕望的な氣持にさへなる。然も逐語的に引用文を揭げてゐる僅

かな場所に於てすら、その引用文の原典の表題や著者の名は大てい伏せられてゐる。概してシェリングは「昔の人達は斯う言つてゐる („Die Alten sagen")」とか「父祖達は斯く言ふ („Die Väter sagen")」といふやうなごく不明瞭な示唆をなすことだけで濟ましてゐるのであるが、これらの場所で彼が實際に引用してゐるのは、何とヤーコブ・ベーメやF・C・エーティンガーの思想に他ならないのである。[1] 聖書からの引用句をすら「或る近東の書 (ein morgenländisches Buch)が述べてゐるやうに」といふ極まり文句をつけて擧げてゐる場合が屢々なのである。けれども一般にシェリングは引用といふことを殆んどしない人であつて、他の人々の思想を完全に彼自身の精神の思想的プロセスの中に吸收してしまふ。他の思想家から由來する諸々のイデーはすべて、燃え盛る暖爐に於ける如くにシェリングの精神の中で溶解され、彼自身の體系の鑄型の中に注ぎ込まれる。彼は天才に特有の無遠慮な態度で、他の思想家に屬する所のものを拾ひ上げ、これを自己に同化してゆく。彼自身の見解に從へば獨創性 (Originalität) こそ天才の本質に相應はしいものであり、その故に彼みづからも歷史的批判に對抗して自己の獨創性の權威を能ふ限り維持しようと試みたのであつた。

一　シェリングと聖書

シェリングは一八一三年の「世代 „Weltalter"」といふ斷片の中で、傳統 (トラディナトン) の問題を詳細に研究し、其處ではつきりと精神史の傳統 (Überlieferung) を信奉することを告白してゐる。「第一原理について學識者として語るすべての人にとつて本來望ましい事柄は、何か或る古くからの神聖なものに結びつくこと、人間の思想が從來據り所として來た、然も一般に承認して來た何らかの傳統に結びつくことである。……そして傳統とこのやうに結びつくことは、確固たる概念が事實上みんな失はれてしまつてゐるいまのやうな時代にもなほ新しい意見を押しつけようとはしないで、密かにではあるがずつと以前から實在して來た眞理に再び力を得させることをしか欲してゐない人にとつては、更に

倍も望ましいことである。[2]」然るにシェリングがここで特に取上げて問題にしてゐる傳統なるものが、ギリシヤ哲學の如きものではなく聖書のことであるといふことは、一驚せざるを得ぬ事柄である。「所で、私はこのやうな意味での傳統を、自己自身の上に永遠の基礎をおいた搖るぎなき原典より以外の一體如何なる場所に、見出すことが出來ようか。かかる不磨の原典のみが、世界と人類とをその始めより終りに至る迄超越的に包括する普遍的な歴史なのである。私はこれ迄屢々かの聖書の箴言を擧げて來たし、又今後も屢々聖書からの引用を行ふであらうが、私がさうすることの理由をば、右に述べた事柄は説明するに十分役立つであらう。[3]」

然しさうはいつてもそれは、當時極めて有力であつた聖書の獨斷的教理學的な解釋の一つにシェリングが加擔してゐたといふことを決して意味するものではない。彼は聖書の解釋そのものに於ては、研究と認識の、完全なる自由と獨立とを要求してゐる。否、そればかりでなく彼は當時支配的であつた獨斷的な聖書解釋を屢々不滿足なものとして批判しさへするのである。「我が國に於ける神學のさまざまの體系の中には、確かに、キリスト教の教義の核心が最も卓越した内容に於て含まれて居りはするが、それは硬化した獨斷的な形態で主張されてゐるだけであつて、理性的思惟と教義との内的な結合や推移や媒介項が其處にはない。然るに思惟との内的結合こそ神學の諸體系を事實上一つの悟性的全體に、卽ち盲目的信仰を最早必要とせず精神とヘルツとの自由なる同意を獲得するに相違ない悟性的全體に、仕上げるものなのである。一言でいへば〔これら既存の、硬化した神學體系には〕内面的（秘教的）な組織が缺如してゐるのであつて、神學の教師は現存諸體系の聖化をこそ特に行ふべきものであらう。[4]」

シェリングはこのやうに、聖書を理論的立場から（theoretisch）高く評價したのであるが、聖書に寄せる彼の實踐的關心もあらゆる點で上述の如き理論的評價に對應するものである。およそドイツ觀念論の哲學者たちの中でシェリングのやうにその哲學的思索が、廣い範圍にわたつて新約及び舊約の言葉を據り所としてゐることの立證出來る人は他にない。シェリングが聖書に精通してゐたのは、彼がたえずそれに思索を凝らしてゐた結果であつて、聖書とのか

うした親密な關係は、彼が聖書から逐語的に引用してゐる多數の引用句に於て認められるのみでなく、彼の文體（シュティール）の上にも直接に影響を與へてゐる。卽ち彼の文體は特にその晩年の作品に於て、屢々豫言書や詩篇やパウロの書簡、就中ヨハネ傳福音書の色彩を帶びて來るのである。

一方、實踐的な立場に於ても彼が聖書に興味を寄せてゐたことを示すのは、彼が一八二〇年から一八二六年にわたるエルランゲン時代にその地の聖書協會の理事をしてゐたといふ事實である。この理事といふ資格で彼は聖書團體の價値と意味とについて一場の演說を行つた。(5) この演說に於て、彼は神學者達が當時行つてゐたやうな聖書の獨占(Monopolisierung)に嚴しく反對し、聖書が國民全體の共有財產たるべきことを主張する。更に彼は、聖書團體が擴大してゆくことによつて、惰眠の中に落ち込んでゐる宗教改革の精神が復興して來るであらうといふやうにまで考へるのである。(6)

所で、シェリングがその著作の中で新約及び舊約の言葉に、それが出てくる場所を精確に擧げて觸れてゐるのは、勿論彼がそれらの言葉に本格的な釋義的考察を加へてゐる場合だけである。だが大抵の場合、彼は聖書の言葉を、特に聖書の言葉としてことはることなく自分の哲學的論證の脈絡の中へとりいれてゐる。かゝる事實は彼の聖書解釋の特色を非常によくあらはすものである。シェリングに從へば、ある一つの知識が眞の知識であるのはそれが聖書の中に傳へられて來たといふ理由によつてではない。むしろそれとは逆に彼は、聖書の中で語られてゐる諸認識が眞理であるといふ點に聖書の權威の基礎があると考へる。正にそれ故に、聖書が傳へる所のすべてに歷史的批判を加へる權利をも彼は承認するのである。

シェリングは、古くからシュワーベン地方に行はれてゐたピエティスムスに特有な敬虔さとそれに由來する聖書實在主義(biblischer Realismus)(7)が極めて强く刻みつけられたある牧師館に生れたのであるが、その彼はチュービンゲン大學に在學中、新約研究の近代的な、歷史的批判的(historisch-kritisch)方向に通曉するに至り、確信を以て歷

史的批判の必然性を肯定したのである。一七九三年から九四年に至る間、彼は數篇の、聖書に對する歴史的批判的論文の執筆を企てた。これらの論文に對する序文の草案は現在も保存されてゐて、その中で彼は「最も廣い意味」での聖書の歴史的解釋を主張してゐる。[8] この歴史的批判的な立場をその全生涯の間、彼は最早放棄することはなかつた。「神話の哲學」及び「啓示の哲學」に於てすら彼は、自分が聖書のみならずキリスト教のすべてを、純粋に歴史的な觀點の下に、單に歴史的現象（フェノメーン）としてのみ考察しようと欲するものであることを繰返し繰返し斷言してゐる。

然しながらこのやうな言明は、シェリングの場合、たとへばダヴィット・フリートリヒ・シュトラウス（David Friedrich Strauß）[9] やブルーノ・バウアー（Bruno Bauer）[10] の場合とは全く違つた意味に理解されなければならない。いかにもシェリングは「自分はキリスト教を一個の歴史的現象として取扱はうと思ふ」と言つてはゐるが、然しこの言明は彼自身の意向では、キリスト教が〔多くの歴史現象の中の〕或る偶然的な一現象に過ぎないといふことを言ふものでは決してない。否、むしろシェリングにとつて、キリスト教の歴史は、歴史に於ける神の自己啓示と特別の仕方で結びついてゐるのである。神がイエス・キリストの姿を採つて受肉したといふことは、シェリングにとつては、歴史に於ける神の自己運動の全體の内でも、最も中心的な歴史的事件であつた。（そして歴史に於ける神のこの自己運動は、創造と救濟とに於ける神の「啓示（manifestatio）」といふことにまで溯るものなのである）。合理主義的な聖書批判が全くの「神話（ミュートス）」として評價したまさにその事柄が、シェリングにとつては歴史の核心となるのであり、又、生（レーベン）を全體的に理解するための彼自身の出發點ともなるのである。彼の根本問題は、神が人と成るためには神そのものの中でいかなる事柄が生じなければならぬか、換言すれば、〔創造以前といふ〕神の一番奥深い所で展開する神の自己運動〔ロゴス〕が〔世界の〕創造と救濟とに進んで行く爲には、かゝる純粋な自己運動それ自身に於ける神の本質がどういふものでなければならないか、といふことである。イエス・キリストに於ける神の受肉は、シェリングにとつては人類の歴史を救濟の歴史として考察するための、神それ自身の中に基礎を有し、何等論議の餘地なき程に明

明白々な前提なのである。歴史的批判といふことは彼の場合、彼の同時代の思想家達の多くがさうであつたやうにこの前提自體を問題にすることでは決してなく、それをたゞ確證する（erhärten）ことを意味したのであつた。

それ故、聖書を理解するためのシェリングの歴史的批判的な努力は、實は彼に豫め與へられた・啓示に關する極めて深遠な神學的認識の枠の内に、記入されたものに他ならない。今やシェリングの中にありありと看取されるのは、シュワーベンのピエティスムスの教父達、特にエーティンガーやベンゲル（J. A. Bengel）[11]らが發展させた聖書實在主義の傳統からの影響である。シェリングに於いて見出される所の、聖書の種々な箇所に關する釋義は夥しいものであるが、それらは直接に、そしてそのあるものはそのままの言葉遣ひで、エーティンガーが〔シェリングが釋義を試みたのと〕丁度同じ箇所で聖書に適用した釋義の方式に結びついてゐるし、[12]更にシェリングのこれらの聖書釋義は、エーティンガーの述作に出て來るギリシヤ語及びヘブライ語原典の翻譯（その或るものはルーテルの聖書譯への批評の言葉の中に見出される）[13]を利用しさへもしてゐるのである。のみならず聖書全體に關するシェリングの把へ方も亦、シュワーベンの教父達卽ちベンゲル及びエーティンガーの聖書理解と合致する。これらの教父達は聖書の中に、一つの全體、一つの有機體、否、更には歴史の中に繼起する神の啓示の體系を認識したのであつた。既にベンゲルは、神は自己開示（manifestatio sui）をその本質とするが、かゝる神の啓示は一擧に（auf einmal）ではなく繼續的段階的に達成されるものであるといふ〔彼自身の〕主張に、最大の價値をおいてゐた。[14]又、エーティンガーに從へば、聖書は一册の在庫品臺帳（Lagerbuch）である、卽ち「生ける神がいかなる仕方で、その業と〔神の證し人達の〕證言とを通じて次第次第に……自己を開示して來たか」[15]がその中に詳細に述べられてゐる所の會計簿（Kontobuch）である。そしてシェリングも亦、正にこれと類似したやり方で聖書をば、一つの統一、一つの全體、次々と然も秩序正しく展開する神の諸々の自己啓示が作り出す一つの體系、「世界及び人類の始めから終りにまでいたる全歴史」として理解するのである。勿論反面に、シェリングは聖書の歴史的批判的考察から生ずる種々な結果に〔從つて否定的な結果に

も]、絶えず直面しない譯には行かないが、然しそれら歴史的批判的研究の成果と雖も、聖書に對する彼の根本的理解を――卽ちイエス・キリストの出現といふ事柄の中に、神が歴史の中へ入つて來たといふ意味を認識し、キリスト教の歴史を神の生（レーベン）の最も内なる處で行はれる運動の啓示として理解する彼の根本的な聖書理解を、いささかも動搖させてはゐないのである。

二　獨逸中世の思辨的神秘思想

聖書の傳統とともにシェリングに大きな影響を及ぼしたのは、他ならぬドイツ中世の思辨的神秘思想である。元來その思想のタイプからいつて、シェリング自身が神秘思想といふ精神的傳統の系列の中にはいるのである。成程彼はマイスター・エックハルトの再發見には何等直接に關與してはゐなかつた[16]、然し彼にとつて、マイスター・エックハルトのまさに直弟子であるタウラー（Johann Tauler, c. 1300-61）の神秘主義的文獻が、極めて親しいものであつたことは確かである。一八〇六年より一八二〇年にいたる最初のミュンヘン滯在期のシェリングは、概括的にいへば、神秘主義的神智學（テオゾフィッシュ）的傳統を專心研究したことによつて特色づけられるのであるが、彼のタウラー研究もこの時期に屬する。友人のシューベルト（Gotthilf von Schubert）[17]に宛てた一八一一年四月二十五日の書簡が示す所は、シェリングがその頃タウラーの著作の種々な版を知つてゐたばかりでなく、タウラーを思辨的思惟の提起者（Anreger）とも、又、ドイツ語の創造者とも評價してゐたといふ事實である[18]。そして事實次のやうな一群の、特にタウラー的な表現――たとへば「沈默せる神性（die stille Gottheit）」「原根據（Urgrund）」「無底（Ungrund）」「離脫（Abgeschiedenheit）」といつた表現が、シェリングの勢位論（Potenzenlehre）の中に再び現はれて來てゐるのである。

同樣シェリングは、ドイツ・バロック時代の詩人で神秘主義者たるアンゲルス・ジレジウス（Angelus Silesius）[19]にも特別の愛著心を抱いてゐた。このアンゲルス・ジレジウスこそは極めて古い、思辨的ドイツ神秘主義の思想を、

「警句（Sinnspruch）」といふ最もひとに感銘を與へ得る形に盛りこんだ人なのである。又、特にシューベルトとの間に交されたシェリングの書簡[20]は、シューベルト、ザイラー司教[21]、フランツ・フォン・バーデル[22]、ブルガー[23]、及びシェリングらがミュンヘンで形成したサークルに於て、いかに神秘思想家の諸著作がテキストとして廻讀されたか、又いかにサークルの各々が、順を追つて彼等一同に廻された神秘主義の同じ盃を仰いだかをよく示してゐる。

三　ヤーコブ・ベーメ

ヤーコブ・ベーメがどんなに深い影響をドイツ觀念論の哲學者のすべてに及ぼしてゐたかを、私は曾て他の機會に指摘したことがあるが、とりわけシェリングに於て、このやうな關係は最も的確に見出すことが出來る。ヤーコブ・ベーメといふ名前がすでに、シェリングが青年時代からそこに生長の根を下してゐた（hineinwachsen）シュワーベン地方の精神的傳統の重要な要素を表はすものに他ならない。このシュワーベンのピエティスムスこそは、それ自身の極めて神智學的自然神學的な傾向を通して、ヤーコブ・ベーメの傳統を更に注意深く培養したのであつた。この場合特にエーティンガーがヤーコブ・ベーメの再發見者となつたのである。[24] エーティンガーはヤーコブ・ベーメの神智學の中に、豫言者といふ、神からの眞實の賜物（Charisma, Χάρισμα）が告知されてゐることを認識した。キリスト教の啓示は、自然の根柢に有る神的基礎に關する限り、ベーメのこの豫言者的靈能（カリフマ）によつてはじめて解明されるに至つたのである。

それ故、シェリングがイェナに於てティークやノヴーリスに刺戟されて、更めてベーメの著作を研究し直したことは、いはば青年時代に於けるベーメへの愛著が彼の中に新たに蘇つて來たことに他ならない。このイェナ時代に、シェリングはティークやノヴーリスらとともに、シュレーゲルの家での文學上の議論に於て、ベーメを「空想家（Schwärmer）」或ひは「錯亂せる夢想家（verworrener Träumer）」として却けるフィヒテの攻撃に對してベーメを辯護

したものであつた。[25]

その後シェリングは、ベーメの研究を、最初のミュンヘン滞在期に、丁度同じ頃ベーメを徹底的に研究してゐたフランツ・バーデルと極めて密接に連繫を保ちながら、推し進めたのである。シェリングはその「啓示の哲學」に於て、彼自身の哲學の「神智學（Theosophismus）」に對する關係を論じた章の中で、ベーメへの哲學的評價を最も明晰に總括してゐる。この箇所で彼は、思辨的乃至觀想的（theoretisch）神秘主義が、積極哲學卽ち彼自身の哲學の先驅者であることをはつきり言葉に出して、認める。彼が其處で示さうとするのは、この思辨的神秘主義が中世の全期間を通じて、如何に、教會により公認されたスコラ哲學に〔對して、一應その周邊に在りながらも事實上それに〕並存するものであつたか、[26] そして宗教改革の後で如何にして今一度立ち現はれ、「ヤーコブ・ベーメの中にその頂點を見出した」[27] かといふ經過である。更にそれに續いて彼が論及してゐるのは次の樣な事柄、卽ち「哲學は現在に至るまで、これら思辨的神秘主義の教說が、或ひは、勿論單に非學問的なやり方に於てではあるが……、爲し遂げようと試みた所の當のもの、或ひはそれが學問的普遍的に明瞭な、理性それ自身に確信を與へるやり方で成し遂げ得ると主張した所のもの、それが一體何であるかを見きはめることが出來ないでゐる。然しまさに哲學一般の認識が其處まで及んでゐないからこそ、この思辨的神秘主義の思想は、それ自身では實現し得なかつた所の、積極哲學へ發展すべき必然性を〔含蓄的に〕含むのである」[28] といふ事柄である。ヤーコブ・ベーメはここでは、思辨的神秘主義の、卽ち〔合理主義的形而上學の體系に對する〕「第二の哲學」として〔哲學史のあらゆる時期に〕いつも現存して居り、その問題とする所が今、シェリング自身の哲學に於てはじめて十全の解決を見てゐるやうな、さういふ思辨的神秘主義の系列の最尖端（Haupt）として現はれるのである。「ひとは、ヤーコブ・ベーメに就いて、彼こそは人類の歷史に於ける、特にドイツ精神の歷史に於ける一つの奇蹟の出現であつたのだ、と言はない譯にはいかない。よしんば假に、私達が、ドイツ國民の、精神及び感情の根源的な深みの中にいかに豐かな資が貯へられてゐるかを、すつかり忘れ去つたとして

も、そのときには、ただベーメのことを思ひ出しさへすればよいのである。ベーメこそは、例へば神話（ミュトロギー）を通俗的心理學から說明することが不可能である丁度そのやうに、ひとが彼について試みてゐる通俗的心理學的說明を遙かに超越して、彼自身の流儀に於て崇高な人なのである。民族の有する神話と神統譜（Theogonie）とは哲學に常に先行するものなのであるが、ヤーコブ・ベーメは、彼が私達に對して記述して呉れてゐる神の誕生の問題に關しては、近世哲學のあらゆる體系に先行してゐるのである」[29]

四　スウェーデンボルク

私達は更に、シェリングの精神上の父親達の中から、第三番目の人物を擧げておかねばならない。その人は卽ちエマヌエル・スウェーデンボルク（Emanuel Swedenborg, 1688-1772）である。このスウェーデンの神智學者にして幻想家なる人物の著述やイデーは、特に一八〇九年以降のシェリングに、異常な影響を及ぼした。彼のスウェーデンボルク研究と最も密接な聯關のある事實として、私達は先づ、ロマンティークの運動が全般に、夢の世界や心の無意識（ゼーレ）的活動や、幻覺や催眠術の現象等々の觀察に、否、それのみでなく後に「似而非心理學（Parapsychologie）」といふ名稱で呼ばれた觀念複合體（コンプレックス）全體の研究へ轉向したといふ事實を擧げることが出來る。シェリングはすでにその最初のミュンヘン滯在期中に、その友人のグループ、特にシューベルトとともにこれらの問題を研究してゐる。心の蔭の側面（Nachtseite）、幻覺とか夢とかいふ經驗は、當時はじめて體系的に研究されるに至つたのである。かゝる時期（エポック）に於て、スウェーデンボルクは思ひがけない再發見を體驗するのであり、かくてユンク－シュティリンク（Jung-Stilling）[30]やラファーテル（Lavater）[31]のみならず、ロマンティークの詩人や哲學者達にも深甚の影響を及ぼした。そして「スウェーデンボルクとシェリングとの」仲介者の役割を果したのは、この場合にも亦かのエーティンガーであつたのである。エーティンガーはスウェーデンボルクの著作をドイツ語に翻譯した最初の人であつた。又、エーティンガーの

神智學上の著述の大部分には、このスウェーデンボルクの中心思想の詳細且つ批判的な分析が含まれてゐる。

然し、シェリングがスウェーデンボルクを再認識するに當つて、上述の如き諸事情にもまして、特に重要な意味があつたのは、カロリーネの思ひがけない死といふ出來事であつた。カロリーネの死はシェリングから妻であり愛人であり友人である女性を奪ひ取り、兩者の愛情溢る結合を――この結び付きに至るまでの、葛藤に滿ちた物語を、その當時の社會は異常なまでに緊張し、敵意を以て追求したのであつたが――引裂いたのである。愛する妻の突然の死によつて、シェリングはある種の思辨へ――卽ちなつかしい故人との交はりを更に續けて行くことへの思辨に驅りたてられた。かくして、眞實の婚姻は死後も繼續するものであり、それは靈的な天上界に於て完成するものであるといふスウェーデンボルクの根本思想が、シエリングには、この言ふに言はれぬ苦しみのただ中での、唯ゞ一つの慰めと思はれたのである。

シェリングはこの思辨を、對話篇クララに於て哲學的に表現した。然し又、「世代」に關する著作の中でもその書簡の中でも、シェリングは靈界に關する自分の思想を繰返し述べてゐる。が、それらのイデーは、ひとへにスウェーデンボルクの諸著作の影響の下に發展していつたものなのである。たとへば彼が一八一一年三月十九日に、未だ全く自分自身の妻の死の打擊の下にありながら、妻を失つた友人ゲオルギー（Georgii）に宛てて書いた手紙は次のやうな內容のものである。

「私の場合、間斷なく反省し探究することはただ、死といふものは人格を弱めるどころか却つてこれを高めるものであるといふ普段からの確信を重ねて裏書きすることにのみ役立つのです。といふのは、死は人格を多くの偶然的なものから解放するのであつて、それ故追憶といふ言葉は、過去の生活から離れ去つた者〔死者〕と後に取り殘された者〔生者〕との間に殘つてゐる意識の內面的な繫がりを言ひ表はすには餘りに弱過ぎる言葉だからです。私達は、私達の存在（ヴェーゼン）の一番奧底ではかの故人達と深く結びついてゐるのです。それといふのも、私達は、私達の最良の

面においては、故人達も亦正しくそれである所のもの卽ち靈に他ならないからです。一生の間、唯〻一つの愛、唯〻一つの信仰、唯〻一つの希望を抱いて來た、そして互ひに心の相通つた魂の間では、來るべき再會は最も疑ひのない事柄でありますし、その再會の曉にはキリスト教が特に約束して來た事柄の中でただ一つの約束と雖も實現されずにゐることはないでありませう。」(32)

五　シュワーベンのピエティスムスの遺產

既に注意しておいたやうに、シェリングがその大を成したのはシュワーベンの神智學の傳統に於てであつた。シェリングの祖先はかなり遠い昔から代々みな牧師であつたが、彼の祖父は夙にヨハン・アルプレヒト・ベンゲルの思想傾向に與みしてゐた。このベンゲルによつて、シュワーベンのピエティスムスに、その本來的特色たる救濟論的な特色（eschatologische Note）が與へられたのである。同樣、青年期に於けるシェリングの生長に影響を及ぼした夥しい親族たちはみなエーティンガー及びベンゲルの徒であつた。シュワーベンの神智學（テオゾフィー）のこのやうな神學的遺產はシェリングのその後の發展に於ては、彼がチュービンゲンの大學で出會つた所の、その當時の合理主義的神學によつて、一旦蔽ひ隱されてしまふ。然しながら彼がフィヒテの觀念論を識るに至るや否や、再び彼の中にはシュワーベンの神智學者の傳統に由來する諸〻のイデーが目覺めて來る。確かにシェリングの後期の發展の中には、彼がかかる神智學の傳統へ自覺的に復歸したといふことが確認出來るのである。特に一八〇二年以後は、彼は愈々確固たる態度でエーティンガーに立歸り、これを據り所とするやうになる。或る友人（Pregitzer）(33)に宛てた書簡の中で、彼は自分自身のことを、エーティンガーの神智學的見（アインジヒト）解の繼承者であり執行者（Vollstrecker）であるといふやうに言ひ表はしてゐる。「エーティンガーが彼個人に於てはとうの昔に見通してゐた多くのものが、一般の人達にもより廣い範圍に渡つて、生き生きと且つ明瞭に、認識されるであらう時期が漸く差迫つてゐる。」(34)勿論シェリングはその學問的勞作の中

では、彼に對するこの偉大な刺戟者エーティンガーの名を何處にも擧げてゐないことは確かであるが、然しエーティンガーの影響といふものは、一八〇三年以後確定的となつたシェリング自身の立場の變化、卽ち自然哲學から神秘的神智學的なものへの顯著な變化、の根柢に既に存在してゐる。「自然に於ける實在的なものと觀念的なものとに就ての論文（„Abhandlung über das Reale und Ideale in der Natur“: 1806）」に始まつて「世代（1813）」に至るまで、何かにつけてエーティンガーに據り掛ることが彼には多くなつてゐるが、かういふ依存關係はたとへば、エーティンガーの主著たる「生の神學（Theologie des Lebens）」の中の種々の概念が、益々數多くシェリングの著作の中に現はれて來る、といふ〔間接的〕形式に於て認められるばかりでなく、エーティンガーの命題や聖書の注釋や種々の定式等の全體をシェリングが文字通り複寫してゐる場合がある、といふ端的な形式に於ても認められるのである。勿論これらの引用や複寫はエーティンガーの名を擧げて爲されてゐるのではなく、「昔の人達はかう言つてゐる（Die Alten sagen）」といふ極まり文句で述べられてゐるだけである。そこで私はエーティンガーとシェリングとの間に事實存在してゐた聯關を次の二點に於て明らかにしてみたいと思ふ。

(a)　シェリングの勢位論（Potenzenlehre）

シェリングはエーティンガーの「生の神學」から直接に影響を受けてゐたが、それは後期シェリング哲學の根本イデーたる勢位論に於て、確かに隨處に認められる事實である。シェリングは、周知の如くその後期の作品に於ては、存在の運動全體を、神的超越者の內なる秘密の深淵に生起した〔この超越者自身の〕自己運動の抑々の發起から、自然及び歷史に於けるそれの最終的な自己展開にまでわたつて、追究することを試み、この追究からして自然哲學及び歷史哲學の唯一可能な統合に到達する、卽ちこの兩者は「中心認識（Zentralschau）」に就ての彼のイデーの中に合流するといはれるのである。

存在の運動のこのやうな見取圖は、實はヤーコブ・ベーメやエーティンガーの形而上學に於て夙に描き出された所

なのである。既にベーメはその著「大秘義（Mysterium Magnum）」の中で、神自身の最も神秘的な内的自己運動を次のやうに描寫した、即ち彼は神の自己運動をば、「無底（Ungrund）」から自己を啓示するといふ神自身の最も神秘的な働らきのうちに絶えず新しい力が登場して來るプロセスとして、描寫したのである。然るにこのヤーコブ・ベーメに注ぎ込んだ中世獨逸神秘主義の思辨的傳統は夙に、神の内的三一的（innertrinitarisch）生命に關するスコラ哲學の思想と結びついてゐたのであるが、それは今やこのベーメの中でユダヤのカバラ思想を俟つて一つの具體的な形態を執るに至つてゐる。詳しく言へば、神の諸力が暗黑なる無底（ウングルント）から展開して來るプロセスを叙述するまさにその場合に、ヤーコブ・ベーメはセフィラ（Sephirah, 複數形 Sephiroth）[35]に關するカバラ學者の說に立歸り、それを據り所としたのである。尤もベーメの思想とカバラとの聯關を文獻上若くは口傳上の源泉にまで溯つて確かめる問題は、現在に至るまで十分の解決を見てゐるとは言へないやうに思はれるけれども。

然るにエーティンガーの場合には、彼がカバラ思想と新らしく接觸をしたといふ事實が、文獻に據つて、より明瞭に把握出來るのである。〔例へば〕エーティンガーは所謂「公女アントニアのためのカバラ學の授業表」[36]に特に立入つて論じてゐるが、この「授業表」の中に見出されるのは、宗教改革期に於けるカバラの偉大な再發見者ロイヒリンが行つたカバラ說の極めて古い研究が、漸く此處に固定した沈澱物を作り始めた、といふ事柄である。エーティンガーは夙に、彼自身の著はした「公女アントニアのためのカバラ學の授業表」への解釋書の序章の中で、超越者の底知れぬ深み、神の「無底（ウングルント）」の中から、種々なるセフィラ即ち神の諸力（勢位（ポーテンツ））がいかなるふうに逐次現はれてくるのかを述べてゐるが、そればかりでなく同じ脈絡に於てエーティンガーは、彼の考へではもともとカバラ說の傳統的な精神に於ても解釋出來る筈の聖書の中の數箇所へ、特に詩篇の第百五十篇第一節たる「その大能のはたらきのゆゑをもて神をほめたたへよ」[37]といふ一句へ、繰返し繰返し立戻るのである。そして彼は、カバラ說が昔からやつて來たやり方に倣ひ、正にこの箇所に於て神の自己擴大（Selbstausdehnung）の作用が極めて神秘的に暗示されてゐることを

看取する。神はその力により、その自己擴大の作用を通じて、全宇宙を滿たす神であり、空間を神の感覺器官（sensorium dei）と化する神となるのである。然るにシェリングに於ては、この詩篇の言葉は、神の諸勢位（ポーテンツ）に關する彼自身の教說を叙述する場合に、又空間を神の自己擴大と見て思辨を凝らす場合に、屢〻繰返されてゐる。〔そこにひとは、エーティンガーのカバラ說解釋がシェリングの勢位論に及ぼした影響を看取すべきであらう。〕たしかに、シェリングの勢位論そのものの根柢には、或一つの思想が、卽ちカバラの傳統の中に既にあり、又ベーメやエーティンガーに於て見出されるやうな或る一つの思想が存在する。その思想の內容は次の如きものである。『神はその最も奧深い本性の上からいへば、自己の暗黑な、底無しの本質を啓示すべく自ら突き進むものである。つまり神の本質そのものが自己啓示（manifestatio sui）へ突進むのである。否、むしろそれ自身が自己啓示自體である。』〔特に〕エーティンガーは、神の本性を「自己を啓示する精神（spiritus manifestativus sui）」とか、又「自己を啓示する存在（Ens manifestativum sui）」とかいふやうに記述した。このやうな彼の見方は、創造及び救濟の歷史に於て、具體化される神の諸力（セフィラ）に就いての〔カバラの〕說と關聯するものであると見て差支へない。

これと正に同樣の思想が、シェリングの勢位論の中にはつきりと言明されてゐる。シェリングにとつても、神の本質をその最も深い衝動から捉へた場合、それは自己自身の啓示といふことにその基礎を置くものなのである。卽ち神の諸勢位（ポーテンツ）は神自身のこのやうな自己啓示の働らきに於て展開するのである。尤もかかる見地をばシェリングはヘーゲルと分つのであつて、それは同じ神學的傳統の中からヘーゲルにも注ぎ込んでゐたのである。ヘーゲルも亦、自己の歷史形而上學の基礎を、歷史とは前進を續ける神の啓示であるといふイデーの上に置いてゐる。言ふまでもなくかゝる事實はシェリングを刺戟した。かくてシェリングは、この〔神の自己啓示といふ〕イデーに於ても、曾ては友人であり後にはライヴァルとなつたヘーゲルから意識的に隔たらうとする。シェリングは言ふ、「世界史の全體を、前進を續ける神の啓示と看做すことは、今やごく當り前の思想となつた。然しいつたい如何にして、神は自己を啓示する

に至つたのであるか、乃至は自己を啓示し始めたのであるか。然るに『神はその本性上、從つて必然的に、自己を啓示する實在（ens manifestativum sui）である。』といふやうな解答は、簡潔ではあるが的確なものではない。といふのは、最高度の滿足感と自發性とから出た業（わざ）とひとが何時も看做して來た所のもの卽ち神の世界創造を、何か神自身に强制されたものとして考へることは、普通一般の感情からいつても困難な事柄であるからである。そして私達は、既に人間に於て、ただ限りなく自由なもの（das überschwenglich Freie）のみを人間の本來的自己と看做すのであるから、況んや神のことを考へる場合には、私達は神から單に必然的な實在を作り出すやうなことを決してせず、悟性的理解を絶した（unfasslich）自由こそ神の本來的自己と考へるであらう。然し問題なのは、まさにこのやうな神の最高の自我卽ち自由の啓示のことである。自由な存在者は、それが自己を啓示しないでもよい正にその故に自由であるのである。自己を啓示するとは働らく（wirken）ことであり、同樣すべての働らきは一つの自己啓示である。然し自由なる存在者にとつては、單なる可能（Können）の內に留まるか、或ひは行動に出るかは自由でなければならない。假に自由なる存在者が必然的に〔自己啓示へ〕進み行くとすれば、そのことによつてそれは、既に、それがまさしく現にそれである所の現實的なもの、卽ち自由なる存在者なのではないであらう……。」[38] シェリングは此處ではつきりと、神は「自己を啓示する存在（ens manifestativum sui）」であるといふエーティンガーの定式を主張しつつ、然もこの自己啓示の思想をヘーゲル的に解釋することに反對してゐる。彼がヘーゲルについて主張する所は、ヘーゲルは、神について、神は自己を啓示しなければならない（müssen）といふやうに說明してゐるが、それによつて實は、神からその自由を奪ひ取つてゐる、といふことである。

ヘーゲルの、かかる考へ方に反對してシェリング自身は、神は、その自由意志を自己啓示の方向に限定し實現してゆく場合にもなほ、絕對に自由であると主張するのであるが、このやうな彼の考へ方は「世代」の中で次の如く定式化されてゐる。卽ち「神はその自己（ゼルブスト）の最高所に於ては啓示的ではない、つまり神は〔この自己の最高所から外へ、主

體的に出て〕自己を啓示するのである（Gott seinem höchsten Selbst nach ist nicht offenbar, er offenbart sich; ……）。神は〔最初から〕現實的に有るのではなく現實に生成するのであるが、それは最も自由なる實在として現はれる正にその爲なのである。[39]」

他方、神の自己啓示そのものをば、シェリングは、「存在（ザイン）が自己を完成するために閲歷する諸々の勢位（ポーテンツ）の、連續的（sukzessiv）な系列[40]」として把へる。連續的啓示といふこの思想は、シェリングの神統譜論（Lehre von der Theogonie）を理解するための出發點である。それは、神は有るのではなく生成する、神は絶えず前進を續けながら自然及び歷史の中に自己を實現してゆく、といふ思想である。そしてこの思想を説明するのに、聖書の中の或る叙述（ビルト）、卽ち豫言者エリアにホレブの山の上で神が現はれた、といふ物語を以てしてゐる點でも、シェリングはエーティンガーの弟子であつた。「主なる神がこの豫言者の前を過ぎ行き給ひし時、その暗き夜の御顔（das nächtliche Gesicht）の中に、先づ山を裂き巖（いはほ）を崩す强き嵐が、それに次いで地震が、最後に火が現はれたが、そのいづれの中にも主御自身は在（いま）さなかつた。けれども〔火の後に〕さながら樹々の葉をさらさらと鳴らす風のやうに靜かな細い聲（ein stillsanftes Sausen）があつた、その中にこそ主（ER）は在（いま）したのである。[41]丁度そのやうに、永遠なるものの啓示に於ても、愛といふ物靜かなそよ風の中にはじめて、主御自身が主御自身（ER Selbst）として臨まれるのではあるが、それに先立つて力や荒々しさや酷しさが來なければならない。[42]」

更に、シェリングのいふ「生の神學（Theologie des Lebens）」になると、彼とベーメやエーティンガーとの繫がりは一際明瞭になつて來る。既にエーティンガーは、その〔神智學上の主著たる〕「生（レーベン）の概念より演繹されたる神學（Theologia ex idea vitae deducta）」に於て、生（レーベン）の概念から神學の全體を導出することを目標としてゐた。エーティンガーにとつては、生（レーベン）の概念こそ新約及び舊約の根本概念、否、更には神學の、端的な中心概念と思はれたのである。「神の啓示とは、朽ち去ることなき（unauflöslich）生（レーベン）の力といふ面から見た、神の榮光の啓示のことであ

る。」[43] 神の生（レーベン）は、彼に於てはヘブル書七章十六節の叙述にある如く、朽ち去らぬもの（ἀκατάλυτος, indissolubilis）と言ひ表はされてゐる、然もそれは、神の内的勢位（ポーテンツ）のすべてが、神の生（レーベン）の中で相互に結合し相互にその内部へ力を及ぼし合つてゐる限りに於て不朽なのである。そして神の生（レーベン）に於てこのやうに解け去ることなく堅く結合しあひ強めあつてゐる諸力の含蓄は、神の啓示の中で順次相繼起して展開するに至るのである。彼の「公女アントニアのためのカバラ説の授業表」〔への解釋書〕の中でも、神の生（レーベン）の不朽といふことが、神の最高の屬性として記述されてゐるが、それは右に述べた彼の思想の脈絡に合致する記述に他ならない。[44]

然るにエーティンガーの言葉そのままに、そして聖書の同じ箇所つまりヘブル書七章十六節を解釋するといふ正に同一の形式で、シェリングは彼の所謂生（レーベン）の形而上學の素描を、「世代」の中で試みてゐる。この生（レーベン）の形而上學は、神を「生ける神」として理解する點にその存立根據を持つ。シェリングがこのヘブル書七章十六節を楯に取つて詳述する所は次の如くである。「私達は生ける神としての神については全く何も知りはしない。神に於ける最高の精神的〔靈的〕生命とその自然的生命との繋がりは、使徒の一人が意味深重に語つてゐるやうに、神の人格（Individualität）の根源的な秘密であり、神の不壞（え）の生命の奇蹟である。」[45] エーティンガーが、神の生の不壞と、自由を誤まつて使用した結果生ずる人間の生命の無常性とを對比させてゐる丁度そのやうな仕方で、シェリングは既にその「自由論」に於て次のやうに語つてゐる。「神にあつては分離し難い（unzertrennlich）統一は、人間に於ては、分離して來ざるを得ない。そしてこのことが善及び惡の存立を可能ならしめる。……その場合惡そのものは、神の内では決して分離することのない諸原理が分離し去ることを意味する。」[46]

(b) 知識説（Wissenschaftslehre）

他方、シェリングが知識全般（ヴィッセンシャフト）[47]の今後の發展について豫言者的な描寫を試みた場合にも、勢位論に於いてと同様、彼とエーティンガーとの間に注目すべき緊密な繋がりが示される。即ち知識説に於ける彼の諸々のイデーも亦、

實はエーティンガーがキリスト教の終末待望の思想を解釋したとき、それとの關聯に於て既に詳細に述べた所のイデーなのである。そしてシェリング自身は、「世代」への序論の最後の所で、人間の知識全般がこれまで辿つて來た發展のプロセスの中に自分自身の立場を定めようとして次のやうに言ふ、「知識の客觀性が今後永久に保證せられるやうな道をつけておくことこそ、私達の世代のために特に取つて置かれた仕事であるやうに思はれる。[48]」かかる客觀性は、シェリングにとつては、自然科學の認識と精神科學の認識とが結合する場合に成立するのである。「〔右に述べたやうな客觀的な〕知識といふものが內面的〔非現實的〕な狀態に制限されたままでゐる限り、かかる知識にはその含蓄をおもてへ出して叙述するための自然的な方途が缺如してゐる。今や永きにわたる過失の後で、自然と自然が曾ては保有してゐた知識との合致が、再び想ひ起されるに至つてゐる。[49]」然し現在人間が到達してゐる知識のこの狀態で、知識と自然との統一が終る、とはシェリングは思はない。程無くして、從來行はれて來た自然的なもの（das Physische）への蔑視は終熄し、自然科學と精神科學との類ひなき結びつきが現はれるであらう。「いましばらく待つならば、元來、未だかゝる客觀的知識を知らぬ人々だけが、あらゆる自然的なものをそれによつて見下してゐたやうな蔑視の風潮は熄んで、もう一度かの『家作りらの棄てたる石は、これぞ隅の首石（かしら）となれる』[50]といふ聖句が認められるに至るであらう。そして知識に通俗性を持たせることは、いままでひとがかくも屢々試みながらも遂に空しかつた事柄なのであるが、自然的なものへの蔑視が熄むその曉には、自ら知識に大衆性が生じ、思想の世界と現實の世界との間には最早何等の區別も生じないであらう。唯一の世界が生ずるであらう。そして黃金時代（das goldene Zeitalter）の平和が、先づすべての知識の調和的な結びつきの中に告知せられるであらう。」

このやうな言葉は、エーティンガーがその著「究極のものについての研究（Abhandlungen von den letzten Dingen, 1759）[51]」の中で既に言明してゐた所の、終末の代（Endzeit）に於ける諸學の發展についてのすべての思想を——勿論エーティンガーよりは更に發展し、そしてシェリング自身の特色を一層よく表はした形式に於てではあるが

――實は繰返したものに他ならない。エーティンガーのこの論文集の中の、最初の論文は、「黄金時代（die güldene Zeit）」といふ表題を持つてゐるが、この「黄金時代」といふ言葉はシェリングの述作の中からも、こだまのやうに反響して來る。所がエーティンガーに於ては、「黄金時代」といふこの表題は決してユートピヤ的な意味を持つものではなく、ベンゲルが、終末の時が到來する期日を計算し、その計算に基いてキリストは一八三六年に再臨すると期待出來ると主張したそのことに影響されてゐる。[52] つまりこの計算は、エーティンガーにとつては、この期日迄にあと約七十五年しかないといふ意味にとれたのである。それでこのやうな時期に當り、世は「黄金時代」の到來を迎へる爲に準備をしなければならない。エーティンガーの論文「黄金時代」が正に意圖する所は、その當時の諸侯や學識者達に對して、彼等の同時代人をかの來るべき時のために準備させることが、彼等にとつていかに焦眉の急を要する事柄であり、又いかに彼等自身の直接の責任に屬する事柄であるかを、告げ知らせることなのである。そして來るべき時の爲に備へるといふことは、將に來らんとするキリストの統治を考慮して是非とも革めねばならぬ政體（Regierungsform）にのみ該當する事柄なのではなく、特に知識にこそ當嵌まる事柄なのである。かくしてエーティンガーは、それ自身の中に個々の學問の認識を悉く包含してゐるやうな、「終末の代」にはじめて到來すべき「光の知（Lichtwissenschaft）」を記述する。この「光の知」について彼は言ふ、「〔かの終りの時にこそ〕ひとは、法學や醫學や神學を、この上もなく單純な根本智によつて再び理解するであらう。山は平和を、丘は正義を告げ知らせるであらう（詩篇七十二篇三節。邦語譯「義によりて山と岡とは民に平康（やすき）をあたふべし」）。自分自身に卽し、自分自身の魂と精神との認識に卽し、更に諸々の被造物に卽して、ひとは三と七といふ數の中に、眼に見えぬ事物、更には神性（ゴットハイト）への扉（die Ausgänge der Gottheit）を認識することが出來るであらう。」[53] シェリングに於けると同樣、このエーティンガーに於ても、ありとある知識のすべての調和的な結びつきこそ、黄金時代の平和への緒となるであらう、といはれてゐるのである。

〔すべての知識の調和的結合たる〕この普遍知（Universalwissenschaft）とは、既にエーティンガーに於ては、神性

への扉の認識のことであつた、即ち種々様々なセフィラや勢位(ポーテンツ)のうちで神が行ふ自己運動或ひは自己啓示を認識することであつた、ただシェリングはエーティンガーのいふ「三」や「七」をば、セフィラに關するカバラ説の思辨を見倣つて、勢位(ポーテンツ)と名づけた迄のことである。「三」や「七」といふ數に於ける神性への扉の認識は、あらゆる學の認識を自己のうちに包括することになる。そしてシェリングは「知識に通俗性を持たすことは、いままでひとがかくも屢々試みながらも遂に空しかつた事柄なのであるが、自然的なもの(das Physische)への蔑視が熄むその曉には、自ら(ず)知識に大衆性が生ずるであらう」と言つてゐるが、それと同様エーティンガーに於ても、黄金時代に於けるこのやうな「光の認識(Lichterkenntnis)」は最早學識者のみの特權に屬する事柄ではなく、「常識(sensus communis)」も亦種々なる學を、この最も單純な根源の知識から理解するであらうことが既に指摘されてゐる。

シェリングとエーティンガーとの間に存在する類同(アナロギー)は、〔根源的〕知識なるものの概念それ自身の内面にまで及んでゐる。エーティンガーにとつても亦、知の中心をなす認識(cognitio centralis)は正しく、自然と歴史との中にある神の諸々の秘密を總括的に觀照することによつて成立した。既に彼は、彼のあとではシェリングが行つてゐるやうに、哲學者や神學者達が自然科學、特に物理學を閑却してゐることに對して、激しい戰ひを行つてゐる。一方彼は、舊約聖書に出て來るユダヤ民族の族長達に於て、救濟史的認識がどのやうにして「族長の物理學(Patriarchal-Physik)」とともに、即ち自然の認識とともに始まつたかを示すのである。のみならず、キリストの祭司達は、かの終末の代に、すべての知識の總括的認識を實現するであらう、とも彼は言ふ。「それ〔總括的認識〕が諸々の學問を高めんことを(Daß sie die Wissenschaften erhöhe !)」といふ表題を掲げてエーティンガーが語る所の内容は、「黄金時代」のことなのである。(54)「イエスの祭司達は、あらゆる知識の源泉(クエレ)であつた。イエスはルカ傳十二章二節で僞善を戒めて、『隱れたるに知られぬものはなし』と語られた。それ故隱れた事物はすべて、その隱れた狀態を脱却しなければなら

ない。[55]」だからエーティンガーは、このイエスの言葉を、ひとに隠してゐる道徳上の不正で顯はれぬものはない、といふ思想の脈絡で捉へたのではなく、自然及び歴史の領域に於いては、存在全體の隠れた内的法則で顯はれぬものはない、從つて自然及び歴史の中で閉されたままの狀態にある・神の自己啓示の・あらゆる秘密で、認識され解明せられぬものはない、といふ意味に取つたのである。「神が内なるものをそれによつて象つてゐる(abbilden)外なるもの、かういふ補助手段なしには、事物の最も内なるもの即ち神(ミスティーク)秘に心を傾けることは十分には出來ない。[56]」この神秘的なるものの認識、即ち内的世界の構成に關する認識は、自然科學即ち外的世界の構成に關する認識と合致しなければならない。

ここに觸れたやうな、エーティンガーに於ける所謂〔キリストの〕祭司達の中心認識や「光の知」の叙述は、概念的にも亦、普遍知に關するシェリングの記述を先取するものである。即ち、エーティンガーは更に言ふ、「様々の知識、例へば論理學即ち理性論(Vernunftlehre)、存在論即ち普遍概念の知、宇宙論即ち世界に關する知、心靈學(Pneumatologie)即ち心靈の知、心理學即ち心の知、神學、天文學、物理學、倫理學、算術、幾何、代數といつた諸々の知識は、イエスの祭司達から引離された存在であり正しい根の上に立つてゐない限りでは、確かに無作法な虚榮心に隷屬してゐる、といへる。にも拘らずこれらの知識のすべてはイエスの御手の中にある。イエスはそれらの知識を通して、隱蔽された一切のものを啓示し給ふ。これらの知識を通して何が生ずるかといへば、一切のものは一歩一歩漸進して行くが、遂に忽然として完全性の中に直觀的に共存するに至る、これを觀るものは神の子らである、といふことである。[57]」このエーティンガーの言葉の中には、シェリングのいふ直觀の概念が次のやうな形で既に先取されてゐる、即ち宇宙論的な意味合ひから見た場合、キリストは自然及び歴史の中に究極的に啓示されて居り、これを觀照(シャウエン)するのが直觀(Intuition)である、といふ形で先取されてゐるのである。

エーティンガーは更に續けて次のやうに言つてゐる。「諸々の知識の中でも生(レーベン)の知が最も重要な知識である。こ

の知識によつて何をひとが學ぶかといへば、いかにして死んだ物質の中から、この物質を生命にまで形成してゆく〔生命自身の〕力が呼び醒まされてくるかといふことである。この生（レーベン）の知識は、生（レーベン）と光とを取扱ふ。そしてこの知識に、算術、幾何、音樂、天文學が附け加はるときにこそ、この生（レーベン）の知識は完全となる。メルキセデクはかかる生（レーベン）の知識を所有してゐた。……だが抑ゝ世の始めより〔このやうな知を所有せる〕メルキセデク的な祭司達が相次いで現はれたのであつて、これらの祭司達はメルキセデクが『不壞なる生命（レーベン）』の力に基いて打樹てた秩序に自分らの知識を順應させたのである。[58]」メルキセデクとは舊約聖書の中で述べられてゐる不可思議な、祭司をも兼ねてゐた或る王のことであるが、この王は、エーティンガーに於ては先に述べた中心認識卽ち直觀（Intuition）の所有者として、かの「光の知」の典型として現はれて來る。「黃金時代」に於ける人類の精神的發展は、この「光の知」に於て完成を見るであらう。更にエーティンガーに於てはかの〔メルキセデク的祭司たる〕賢者たちはすべてメルキセデクに續く者として現はれて來るのであつて、これら賢者達は、自然及び歷史に於ける一切の秘密についての認識を相互に內的に聯關させる目標を立て、キリストの祭司達の側から知識の改革を實現すべく奮鬪するのである。「終末の代」にこの目標が成就することについては、更に次の如く言はれる。「卽ち眞なる知識は、諸ゝの神的な事物の精髓（インベグリフ）であつて、この精髓は先づ精神（ガイスト）の中に自己の座を占め、次いで理性の中に溢れ出す。神はこの眞なる知識を精神の中に埋沒させた、從つて師たるものは神を媒介として、この眞なる知識を〔精神（ガイスト）の中より取出して〕理性の中に齎らさねばならぬ、又理性は眞なる知識と精神とを一致させねばならず、そのことによつて精神は神と合一しなければならない。[59]」かくして諸ゝの知識の中心をなす「光の知」は、神と最も完全に合一する方法として、つまり神自身は人間の中に自己を認識し、人間は神の中に自己を認識するに至る如き方法として現はれる。シェリングの「中心認識」及び同一哲學に於ける根本思想は、既にこのエーティンガーに於て豫め形成されてゐたのである。

更にシェリングの歷史哲學とエーティンガーの終末論（エスカトロギー）（終末の代への待望）及び歷史神學との間の聯關を探究する

場合にも、似たやうな事態を論證することが出來よう。然しこの問題を、私達はドイツ觀念論の歷史哲學に於ける終末論的基礎を論じた別の論文で取扱ふことにしよう。(60)

それはともかく、いまここに私が展開した研究によって、シェリングの哲學はその最も重要なイデーに於ては、十八世紀のキリスト教神智學の、或る特定の含蓄を持つた理念と、直接かつ內面的な聯關を持つものであることが證明されたやうに筆者には思はれる。そして更に、この十八世紀のキリスト教神智學の理念それ自身は、マイスター・エックハルトやヤーコブ・ベーメやそれに續く人達に於て現はれて來た所の、神秘主義神學の極めて古い傳統を新たに近世的に形成し直したものであつた。ドイツ觀念論の哲學は、その最も深い所ではドイツ神秘主義といふ基本線に內面的に連續してゐるのであつて、この基本線からドイツ精神史に於ける形而上學及び思辨の歷史全體に對して、最も强烈な又最も生き生きとした刺戟が出て來たのである。ひるがへつて、哲學も、亦、神學もともに、人間の實存を〔その歷史的背景から切離して〕ただ瞬間といふ一點からのみ理解することに馴れてしまつた〔現代のやうな〕時期に於ては、觀念論哲學の體系と過去の宗教的傳統の偉大な保持者たちとの間の、確固たる歷史的連續性と內的聯關とを指摘することが、私には特に大切と思はれる次第である。

(了)(譯　酒　井　修)

譯註

(1) Oetinger, Friedrich Christoph: 1702-82 ヴュルテンベルク派のピエティスムスに屬する宗教思想家。その研究は極めて多方面にわたつてゐた。一七三八年以後聖職に從事しつつ著作を發表。神秘思想、神智學、ベンゲルの默示錄的思想等に影響されつつこれを正統的神學と結合して一つの體系に作り上げようとした。主なる著作に Reden nach dem allgemeinen Wahrheitsgefühl, 1758 f., Theologia ex idea vitae deducta, 1765, Swedenborgs und anderer irdische u. himmlische Philosophie, 1765 等が、又全集には E. Ehmann の編した十一卷(一八五二—五七)、選集には O. Herpel の編したもの(一九二三)がある。

(2)* Schelling, Sämtliche Werke, Abt. I, VIII, S. 270 f. なほ、シェリングの著作からの引用文に對し、ベンツ博士が、その

„Schellings theologische Geistesahnen“ (1955) に於て掲げてゐる頁付（以下、單に Werke Abt. I 又は Abt. II と略記）は、すべてコッタ版シェリング全集（Stuttgart u. Augusburg, 1856–1861）の卷數及び頁數である。この全集を同博士が使用される理由については、同博士の、上掲書十三頁參照。

(*3) Werke, Abt. I, VIII, S. 271.

(*4) Werke, Abt. I, VIII, S. 271.

(*5) Werke, Abt. I, IX, S. 247. Über den Wert und die Bedeutung der Bibelgesellschaften.

(*6) Werke, Abt. I, IX, S. 249.

(7) Biblischer Realismus——ヴュルテンベルクのピエティスムスに於ける聖書主義神學（Biblizismus）のことであらう。この一派は、神秘主義及びイデアリスムスの影響をうけ、聖書を神的思想の完結體系と見做した。その代表者は、ベンゲル、エーティンガー、ベック、アウベルレン等である。

(*8) Kuno Fischer, Schellings Leben, Werke und Lehre, S. 12 f.

(9) Strauß, David Friedrich: 1808–74. ヘーゲル左派の代表的思想家。はじめチュービンゲンの大學で哲學を講じたが、一八三九年以後は教職を離れて大體文筆活動に終始。著書にヘーゲル學派分裂の因をなした一八三五年の Das Leben Jesu があり、他に Christliche Glaubenslehre (1840–41), Der alte und der neue Glauben (1872) 等多數。全集はツェラーの編した十二卷のものが一八七六—七八年に刊行されてゐる。

(10) Bauer, Bruno: 1809–82. ヘーゲル左派の神學者として聖書に對する否定的批評よりその著作活動をはじめ、後には政治・時事に對する論述も多くなした。彼に於てヘーゲルの歴史哲學は無神論に轉回し、イデーに代る人間の天才的自意識といふ概念があらはれる。主著として普通擧げられるものに Der Apostelgeschichte (1850), Kritik der Evangelien und Geschichte ihres Ursprunges (1850–52), Christus und Zaesaren (1877) 等がある。

(11) Bengel, Johann Albrecht; 1687–1752. ヴュルテンベルクのピエティスムスに屬する神學者。彼は又ドイツに於ける新約聖書批判の創始者である。彼の著 Gnomon Novi Testamenti (1742) は、名著といはれ、今日に至るまで讀者を有する。この著に於て彼はピエティスムスの立場から「神の國」の聖書神學を歴史的且つ默示錄的に基礎づけようとした。

(*12) 聖書釋義に關するシェリングとエーティンガーとの聯關の考證については、ベンツ博士の Schellings theologische Geistesahnen, 1955: S. 20–25 參照。

(13*) ベンツ博士上掲書の同所を參照。そこではエーティンガーの Biblisches Wörterbuch (hgg. von Hamberger mit einem Vorwort von G. H. Schubert, Stuttgart, 1849) の各項、たとへば „Elemente der Welt“ „Natur“ や „Rad der Geburt“ 等の項が例として擧げられてゐる。

(14*) Dr. Johann Albrecht Bengels Sechzig erbauliche Reden über die Offenbarung Johannis oder vielmehr Jesu Christi, Stuttgart 1870, Rede I zu Kap. 1, 1–3, S. 7.

(15*) Vgl. Oetinger; Biblisches Wörterbuch, S. 363, u. s. f.

(16*) Vgl. Ernst Benz, Die Mystik in der Philosophie des deutschen Idealismus (Euphorion Bd. 46, 1952), S. 283.

(17*) Schubert, Gotthilf Heinrich von: 1780–1860. ドイツ浪漫派の哲學者。シェリングの思辨的自然哲學の方法を心理學(千里眼や夢)や動物磁氣の領域に於て實證しようとした。主著、Abhandlungen einer allgemeinen Geschichte des Lebens, 3 Bde., 1806–20. Die Symbolik des Traums, 1814. Geschichte der Seele, 2 Bde., 1830.

(18*) Plitt, Schellings Leben in Briefen, Bd. II, S. 252–253.

(19) Angelus, Silesius 1624–77. 本名 Johannes Scheffler. 十七世紀に於けるドイツの神秘的宗教詩人。新教に反對し一六五三年にカトリックに改宗、六一年にフランチェスコ派の僧籍を得、六四年にはブレスラウ宮廷宗教顧問となつた。彼はドイツ及びスペインの神秘思想家の思想を、警句の形で力强く定式化する。詩によつて彼は自分の宗教的苦悶を表現した。代表作は Alexandrinern: 1657 (のちに Cherubinischer Wandersmann と改題された)、又著作集として G. Ellinger の編した二卷、H. L. Held の編した三卷(一九四九—五二)がある。

(20*) Plitt, op. cit. S. 252.

(21) Sailer, Johann Michael: 1751–1832. ドイツのカトリック教會の神學者又教育學者。最初イエズィタ教團に入り、一七七五年以後各地で神學を教授、一八二一年以後レーゲンスブルク教會に在り、同二九年にその司教となつた。全集として Widmer の編輯した四十卷が一八三〇—四五年に出てゐる。

(22) Baader, Benedict Franz Xaver von: 1765–1841. ドイツのカトリック系神秘主義者。各地に遊學後、生國バヴァリアに歸り一八一三年貴族となる。その前後より神秘主義を奉ずるに至り、ベーメに親しんだ。彼も亦、神は人間に於て自己展開するが、それは同時に暗黑なる無底からの、神の自己解放である、と考へる。二六年にはミュンヘン大學の哲學及び神學の名譽教授となる。ホフマンの編した全集十六卷がある。

(23) 未詳
(24*) Ernst Benz; op. cit. S. 28, Bemerkung 1.
(25*) Plitt, op. cit. I S. 245-246, H. Düntzer, Ungedruckte Briefe aus Knebels Nachlaß II S. 19.
(26*) Werke Abt. II, III, S. 119.
(27*) Werke Abt. II, III, S. 120.
(28*) Werke Abt. II, III, S. 120.
(29*) Werke Abt. II, III, S. 123.
(30) Jung-Stilling, Johann Heinrich: 1740-1817. ドイツの宗教文學者でその思想はピエティスムスの傾向と空想的未來觀とを多分に有する。然し多方面の社會活動によつても有名である。たとへばエルベルフェルトでは内障眼手術の名醫として名を馳せたし、一七八七年にはマールブルクで經濟及び財政學の教授となつた。一八〇三年以後はバーデン選帝侯の保護によつて自由な著作生活に入つた。多くの自傳中 „Heimweh“ (4 Bde., 1794-97) はバンヤンの「天路歷程」の影響下に成立したものといはれ、愛讀者を多く持つ。神秘主義的ピエティスムス的著作も少くない。全集には J. N. Grollmann の編した十四卷（一八三五—三八）がある。又、ベンツ博士にも Jung-Stilling in Marburg (1949) といふ著がある。
(31) Lavater, Johann Kasper: 1741-1801 いはゆる「疾風怒濤時代」の特色を體現した異色の人物。その社會活動及び詩作を通じて青年時代より著名であつたが、彼の名を後代に留めたのは實にその、Ch. Bonnet に影響された骨相學である。詩人としてはクロップシュトック派に屬する。これらの活動を通じて彼の抱いてゐた關心は本質的に宗教的なものであつた、といはれる。主著は、ゲーテも亦協力した "Die physiognomischen Fragmente, 4 Bde. (1775-78) である。又、全集六卷（詩作のみ、一八三六—三八年）及び選集八卷（一八〇二—三年）がある。
(32*) Plitt, op. cit. II, S. 317.
(33*) エーティンガー學派の牧師プレギツェルとシェリングとの交渉については、ベンツ博士の上掲書、特に四三—四四頁參照。
(34*) Plitt, op. cit. II, S. 179, Ernst Benz, op. cit. S. 44.
(35) Sephirah（本來は數の意、複數形 Sephiroth）藤田健治氏譯、ヘーゲル、「哲學史」中の同氏の注を引用すると次のやうなことになる。カバラ哲學の思想によれば、神はエンソォフ Ensoph（無限）といはれる。數の一が一切の數の本源でありながらそれら一切の數のいづれでもないのと同じやうに、エンソォフは一切のものの原理である。この第一無限者は唯一且つ

第一原因であつて一切を eminenter 且つ causaliter に含む。(ii)この第一無限者の限定（ὅρος）として最初に現はれるものが、最初の人たるアダム・カドモン及びこれと關聯してゐる所の、純粋な神的力又は叡智の世界、即ち十個のセフィラの世界である。これらのセフィラ、即ちセピロートの中、最初の三つが冠（Keter）、智慧（σοφία）理性（λόγος）であつて、此處より順を追つてアチラ（Azilah 神的叡智界）、ブリア（Beriah, 觀念界）、エチラ（Jezirah 靈魂界、恒星の靈魂）、アシア（Asijah 物體界、感覺界）といつた各界が出て來る。これらについては、ヘーゲルの哲學史第三卷「カバラ派の哲學」（ヘーゲル全集、グロックナー版十九卷、二十六―二十九頁）の項に詳細な敍述がある。且つ上揭邦譯書の注を參照。

(36*) 公女アントニアと、彼女のための、カバラ學の授業表とについては、ベンツ博士の上揭書四十八頁參照。試みに同頁三行目以下を左に譯出して見よう。

「……カバラ說はヴュルテンベルク公國では、注目に價する特別の傳統を持つてゐた。エーティンガーはこの傳統と直接に結びついてゐる。ヴュルテンベルクの公女アントニア（一六一三―一六七九）、即ち大公エーベルハルツ三世の妹たるこの人は、すぐれたカバラ學者たる牧師J・J・シュトレーリンに指導されて、ヘブライ語とカバラ哲學の秘密の中に歩み入ることが出來た。シュトレーリンが抑〻カバラ說の傳統をキリスト教的に轉釋することを企てた人なのである。カバラ說の傳統がかういふ形で定着した事實を表はしてゐるのが、いはゆるカバラ學の授業表であつて、この授業表（レーアクツフエル）をばヴュルテンベルクの公女アントニアは、有名な湯治場タイナッハの教會で公開させたことがあつた。そして彼女の死後その遺體は遺志によつて、この授業表（レーアクツフエル）を胸に載せて埋葬されたのである。この授業表は、キリスト教化されたカバラ說の全體系をきはめて寓意的に敍述したものであつて、このキリスト教化されたカバラ說の全體系に於ては、十箇のセフィラとそれの、神からの溢出のみならず、受肉の秘密も亦敍述されてゐるのである。この、公女アントニアのためのカバラ說の授業表を說明するために、エーティンガーが著はした神智學の著作は、文體の上からいへば錯綜してはゐるけれども極めて重要な著作であつて、キリスト教化されたカバラ說の體系の敍述をその內容とする。エーティンガーは、前々からより新らしいカバラの文獻研究を根據として、この授業表（レーアクツフエル）の解釋を試みようと努力してゐた。そしてソハール[61]だけでなく特にロリヤのカバラ說の著作を研究したのである。加之、彼の書簡も著作も齊しく、彼が夥しい當時のユダヤ人の、カバラの傳統の專門家たちと個人的につながつてゐたことを示してゐる。……」

又同書四十六頁によると、エーティンガーのこの著は「ヴュルテンベルクの今は亡き公女アントニアの授業表（レーアクツフエル）といふ周

知の遺品 „Offentliches Denkmal der Lehrtafel einer weil. Württembergischen Prinzessin Antonia“（一七六三年）」なる神智學上の主著であつて、これとシェリングの自由論との密接な關聯を、すでに一八四七年にカルル・アウグスト・アウベルレンが、後にローベルト・シュナイデルが注意してゐる、といふことである。

(37) 詩篇の第百五十篇の一節は「エホバをほめたたへよ、その聖所にて神をほめたたへよ、その能力のあらはるる穹蒼にて神をほめたたへよ」であり、その次の二節が「その大能のはたらきのゆゑをもて神をほめたたへよ」といふ一句で始まる。

(38*) Werke, Abt. I, VIII, S. 305-306.

(39*) Werke, Abt. I, III, S. 308.

(40*) Werke, Abt. I, VIII, S. 309.

(41) 舊約聖書、列王紀略の上、十九章十一—十二節。なほ邦譯では「(十一)エホバ言ひ給ひけるは出てエホバの前に山の上に立てと。茲にエホバ過ぎゆき給ふにエホバのまへに當りて大なる强き風山を裂き岩石を碎きしが風の中にはエホバ在さざりき。風の後に地震ありしが地震の中にはエホバ在さざりき（十二）又地震の後に火ありしが火の中にはエホバ在さざりき、火の後に靜なる細微き聲ありき」となつてゐる。

(42*) Werke, Abt. I, VIII, S. 311.

(43*) Oetinger, Philosophie der Alten II S. 40 f.

(44*) Auberlen, Theosophie Oetingers, S. 168; vgl auch Oetinger sämtl. Sch. Bd. 7, S. 468.

(45*) Werke, Abt. I, VIII, S. 259. なほヘブル書七章十六節の邦語譯は、「又メルキゼデクのごとき他の祭司おこり、肉の誡命の法に由らず、朽ちざる生命の能力により立てられたれば、我が言ふ所いよいよ明かなり。」である。

(46*) Werke, Abt. I, VII, S. 364: S. 365. S. auch S. 377. このベンツ博士の引用文はコッタ版原文と多少異つてゐる。

(47) ベンツ博士の前揭書では、„Wissenschaft“ の代りに „Menschheit“ といふ言葉が用ひられてゐた。同書六十四頁參照。

(48*) Werke, Abt. I, VIII, S. 205.

(49) Werke, Abt. I, VIII, S. 205. 但しこの箇所に於けるベンツ博士の引用文はコッタ版の原文を多少變へてゐる。たとへばコッタ版の „wieder geworden“ はベンツ博士の引用では „wiedergewonnen“ となつてゐる。

(50) マタイ傳二十一章四十二節、マルコ傳十二章十節、ルカ傳二十章十七節。

(51*) 現在、エーティンガーの著作集第二部第六卷の中に再版されてゐる。

(52*) Ernst Benz, Joh. Albr. Bengel und die Philosophie des deutschen Idealismus (Deutsche Vierteljahrschrift für Lit.-wiss. u. Geistesgesch. Jg. 27《1953》Heft 4, S. 528 ff.)

(53*) Oetinger, op. cit. S. 21.

(54*) Oetinger, Die güldene Zeit, 23 Kapital.

(55*) Oetinger, op. cit. S. 114.

(56*) Oetinger, op. cit. S. 117.

(57*) Oetinger, op. cit. S. 139.

(58*) Oetinger, op. cit. S. 116.

(59*) Oetinger, op. cit. S. 115.

(60) このテーマは「ドイツ觀念論の歷史哲學に於ける終末論的基礎」といふ表題の下に、京都大學教養部〔獨逸文學〕鹽谷饒助教授が譯出され、本誌第四百五十七號に掲載の豫定である。

(61) Sohar……カバラ說それ自身は、十三世紀以後のユダヤ神秘思想の名のことであつて、その主要文獻が「光輝（Glanz）」を意味するソハールといふ名を持つのである。これは折々不明瞭なアラム語で書かれてゐて、二世紀のラビ、Simon bar Jochai が書いた、といふことになつてゐる。（然しこの餘り統一のない、モーゼの五書を神話化する意圖をもつた注解に活を入れたのは、一三〇五年に死んだカバリスト、Moses ben Schemtob de Leon であつた。）ソハールは一五五八年にクレモナで始めて印刷された。そしてユダヤ人のスペインからの追放（一四九二年）後、カバラ思想が再び行はれるやうになつたのは、Rabi Isaak Lurja (1533-1572) によつてである。ロリヤ（Lorija）とベンツ博士が言つてゐるのは、このLurja のことであらう。このピタゴラニズム、新プラトン主義、グノーシスの混合が目指してゐるのは、究極的秘密を精神的に認識し、それによつて天上にある神人アダム・カドモンに形取つて作られた人間とかくれた神とのウニオ・ミスティカを得ることである。このウニオ・ミスティカを可能ならしめるのは、Kawwana といふ忘我の祈りである。

（筆者　ドイツ國マールブルク大學神學部〔教會史〕教授）

（附　記）ここに譯出したのは、昨三十二年九月より今年一月まで五回にわたり「ドイツ觀念論哲學の宗教的基礎」と題して京都大學文學部に於て行はれたエルンスト・ベンツ博士の集中講義中の第四講（これは十二月十日(火)に講ぜられた）である。

同博士が神學、哲學、歴史の各領域に展開されてゐる赫々たる業績については最早多言を要しないであらう。譯出に當つては文學部有賀鐵太郎教授、教養部鹽谷饒助教授の御指導を得た。譯註の大部分（*印のもの）は、博士の著、Schelling, Werden und Wirken seines Denkens (Zürich, 1955) 及び Schellings theologische Geistesahnen (Mainz, 1955) に據つたが、その他に於て疑ひの存するものは、一應 Der große Brockhaus (1955, Wiesbaden) に從つた。なほ譯文中（　）は原文中の括弧を示し、又、〔　〕内及び（　）内の原語と〇の傍點は、意味補足のために附加したものである。（譯者）

次目號前

室町時代初期に於ける畫僧如拙の存在意義……蓮實重康

リルケに於ける限界汝却の理想……三浦アンナ
……谷友幸譯

ヘーゲルに於ける行爲の構造……中埜肇
——特に悲劇に關聯して——

新刊紹介　G・マランチュク「S・キヤケゴーァの著作入門」「S・キヤケゴーァの教會攻擊」……大谷長

彙報

Man meint: die Transzendenz müsse doch, wenn sie eine Möglichkeit des menschlichen Daseins ist, in der Geschichte geschehen. Aber was bedeutet dieses *in*? Dies genau zu erläutern, ist eine Hauptaufgabe unseres Aufsatzes.

Schellings theologische Geistesahnen

von Ernst Benz

Der Verfasser möchte hier an der Gestalt Schellings ausführlich erläutern, wie die engsten Zusammenhänge zwischen der Philosophie des deutschen Idealismus und der älteren Tradition der christlichen Mystik, besonders der Theosophie des 18. Jahrhunderts besteht. Um diese Zusammenhänge zu bestätigen, hat er folgende fünf Momente als die theologische Geistesahnen Schellings erwägt.

1) *Bibel.* Schelling hat während seines Studiums in Tübingen die moderne historisch-kritische Richtung der neutestamentlichen Forschung kennengelernt und hat mit sicherer Intuition die Notwendigkeit der historischen Kritik anerkannt. Aber sein historisch-kritisches Bemühen um ein Verständnis der Schrift ist in ein vorgegebenen tieferes theologisches Verständnis der Offenbarung eingezeichnet, ganz verschieden von den Fällen bei *D. Fr. Strauss* and *B. Bauer;* denn seine Grundfrage ist: Was muß in Gott selbst vorgegangen sein, daß es zur Menschwerdung Gottes kam? Hier wirken sich bei Schelling die Traditionen des biblischen Realismus aus, wie ihn die Kirchenväter des schwäbischen Pietismus entwickelt haben, vor allem Oetinger und Bengel.

2) *Die Spekulative Mystik des Mittelalters.* Seinem Denktypus nach gehört Schelling selbst in die Linie der spekulativen Mystik des deutschen Mittelalters hinein. Besonders, in der Zeit seines ersten Aufenthaltes in München von 1806–20, wo er intensiv die mystische und theosophischen Überlieferung studierte, beschäftigte er sich auch mit *Tauler.*

3) *Jacob Böhme.* Schon in Jena studierte Schelling die Werke Böhmes aufs neue im Originaltext, angeregt durch *Tieck* und *Novalis.* Er setzte dann sein Studium Böhmes während seines ersten Aufenthaltes in München fort, in stärkster Auseinandersetzung mit *Baader.* Schelling bekennt sich in seiner *„Philosophie der Offenbarung"* ausdrücklich zum spekulativen Mystizismus als zu dem Vorläufer seiner eigenen Philosophie. Jacob Böhme erscheint hier als das Haupt einer Linie der spekulativen Mystik, deren Anliegen nunmehr in Schellings eigener Philosophie seine Erfüllung findet.

4) *Swedenborg.* Die Schriften und Ideen Swedenborgs haben auf Schelling vor allem ab 1809 einen außerordentlichen Einfluß gehabt. Besonders bedeutungsvoll für seine Wiederentdeckung Swedenborgs war der unerwartete Tod Karolines, der Schelling in Spekulationen über die Fortsetzung des Umgangs mit geliebten Verstorbenen stützte. Er hat diesen swedenborgschen Spekulationen einen philosophischen Ausdruck in seinem Dialog *Clara* und seiner Schrift über *„Die Weltalter"*.

5) *Das Erbe des schwäbischen Pietismus.* Von 1802 an hat Schelling vor allem auf Oetinger immer stärken zurückgegriffen. Diese Zusammenhänge zwischen Oetinger und Schelling sollen besonders an folgenden zwei Punkten erhellt werden. a) *Die Potenzenlehre Schellings.* (α) Der Potenzenlehre Schellings selbst liegt ein Gedanke zugrunde, der sich schon in der kabbalistischen Überlieferung und bei Böhme und Oetinger vorfindet : das Wesen Gottes selbst drängt aus dem dunkeln Urgrund Gottes heraus zur Offenbarung seiner, ja ist selbst *manifestatio sui.* Auch für Schelling entfalten sich die Potenzen Gottes (Sephiroth genannt bei Kabbala und Oetinger) im Akt dieser Offenbarung seiner selbst. —— (β) Dann wird deutlich der Zusammenhang mit Oetinger in Schellings *„Theologie des Lebens"*. Ganz in den Worten Oetingers und in Form einer Auslegung derselben Bibelstelle Hebr. 7. 16 entwirft Schelling in „Weltalter" seine Metaphysik des Lebens, die ihren Grund in dem Verständnis Gottes als des „lebendigen Gottes" hat. b)

Wissenschaftslehre. Schellings prophetische Ideen von der zukünftigen Entwicklung der Wissenschaft finden sich bereits bei Oetinger. Dieser entwickelt solche Ideen bei seiner Auslegung der christlichen Endzeiterwartungen. Oetinger gibt in seiner Abhandlung „*Die güldene Zeit*" eine Beschreibung der kommenden „*Lichtwissenschaft*" der Endzeit, die in sich die Erkenntnisse aller Einzelwissenschaften enthalten wird. Diese Lichtwissenschaft d. h. *cognitio centralis* des Hohepriestertums Christi bei Oetinger nimmt begrifflich Schellings Beschreibung der *Universalwissenschaft* voraus.

Diese bisherigen Untersuchungen des Verfassers scheinen zu bestätigen, daß die Philosophie Schellings in ihren wichtigsten Ideen in einem unmittelbaren inneren Zusammenhange mit den gestaltenden Ideen der christlichen Theosophie des 18 Jahrhunderts (besonders Oetingers) steht, die ihrerseits eine moderne Weiterbildung älteren Tradition der mystischen Theologie ist. Wie bei Schelling, so ist die Philosophie des deutschen Idealismus überhaupt aufs tiefste eingebettet in die innere Kontinuität der Grundlinie der deutschen Mystik.

(übersetzt und resumiert von Osamu Sakai)